

〈研究ノート〉

井出季和太の南洋・華僑調査

——南進基地台湾のインテリジェンス——

長谷部 茂

要旨 第二代台湾総督桂太郎の「台湾統治に関する意見書」にあるとおり、領有以来、台湾は日本の南進基地としての役割を期待されていた。植民地台湾を拠点として中国沿海及び南洋地域に展開された調査事業は、貿易、資源、風俗習慣から政情、人心の帰趨にまで及んだ。井出季和太は、二十年にわたる総督府官吏としてのキャリアのほとんどをそのような調査事業に費やした。それは退官後も満鉄東亜経済調査局で続けられたのである。

井出の調査は常に国策と不可分であった。井出は、日本の政策動向を情報の最先端で感じ取り、政策遂行を念頭に置いて最良と思われる調査結果を出した。本論の目的は、井出の南洋・華僑調査を日本の南進政策を映す鏡と見て、井出を通じて南進基地台湾が担ったインテリジェンスの実態に迫ることにある。

本研究ノートは、その基礎的作業として、まず井出の業績と人物像を明らかにする。

一、前言

井出季和太は、戦争をはさんで約十年間、拓殖大学に在職し、戦前は専門部講師として支那経済事情、満支経済事

情を、戦後は学部教授として中国研究及び研究指導を担当した。拓殖大学は、日本統治下の台湾開発に献身する青年を育成するために台湾協会（のち東洋協会に改組）が創設した台湾協会学校を前身とする。井出は、その卒業生の多くが勤務する台湾総督府で二十年にわたり官吏として、台湾及び南中国の調査事業に従事した。井出はまた協会機関誌『東洋』の常連寄稿者でもあった。拓殖大学図書館には、東洋協会旧蔵の「旧外地資料」の中に計十七冊の著書が確認できる。

このように、井出は拓殖大学と浅からぬ縁由を持つが、学内において、ほとんど忘れ去られた存在であったと言わなければならない。井出に関する史料は、図書館所蔵の著書を除けば、『拓殖大学論集』に寄稿したわずか一篇の論文と、人事課の所有する履歴書、それに卒業生アルバムの写真一枚、教職員住所録、学友会（同窓会）会員名簿、そして同僚教員の語った二行に満たないエピソードだけである。

忘れ去られているのは、拓殖大学においてばかりではない。後掲の表に示したように、井出は膨大な著作を残しているにもかかわらず、彼の主な業績と考えられる中国貿易・関税、台湾史、華僑研究等の分野においても取り上げられることはほとんどない。唯一の例外は、現在でも台湾史研究者が必ず引用する『台湾治績史』であるが、これは「台湾総督府資料編纂会の精神と成果を継承した準官製の施政史とも言えるであろう」とされ、井出個人の著作とは見なされていない。

筆者の知る限り、井出の全著作に目を通し、その足跡を追い、井出季和太という人物像に迫ったのは、『台湾近現代史研究』に「人物・日本植民史」シリーズとして掲載された金子文夫「井出季和太と日本の南進政策」（一九八一年）^②だけである。金子は、井出の生涯とその著作を簡潔に紹介し、一部の著作には解題も付している。拓殖大学所蔵の履歴書も実見したようである。

以下に金子の論文の骨子を紹介する。

金子は、井出の生涯を四つの時代に区分し、それぞれの時代に取り組んだテーマを次のように分析している。

- 一、税関事務官時代——中国の貿易・関税問題
- 二、警務局翻訳官時代——台湾統治史
- 三、熱帯産業調査会時代——華南の産業・経済事情
- 四、東亜経済調査局時代——南方華僑問題

後掲の表（「井出季和太の全仕事」）から見ても、この区分は的を射たものであると認められる。

井出の人物評は、あまり肯定的でない。金子は、「植民政策の研究者というよりも、中国および南方の経済事情の調査マンの性格が強い」と述べ、その獨創性に疑問を呈し、「総じて井出の調査研究活動は、日本の南進政策の展開と密接に照応しつつ変遷を重ねた」とし、華僑研究については「時局便乗型」の態度であると批判もしている。戦後の著書『講和会議と台湾の帰趨』³に至っては「奇妙な時代錯誤の議論を展開している」とかなり手厳しい。しかし一方で、「南進拠点としての台湾の問題に接近できること、そして日本の南進政策の展開と対応している点」、「従って、彼の活動の軌跡をたどることは、そのまま日本の南進政策の一面面を解明する意味をもつと思われる」と、井出の検討を日本の南進政策を知るために意味あるものとしている。

井出を研究者ではなく調査マンとする点は、筆者も同感である。彼のほとんどの著作は、調査報告そのものか、その延長であり、そこから井出個人の思想をくみ取ることとはほとんど不可能である。前掲の『講和会議と台湾の帰趨』は、井出の調査マンでない一面がうかがえる著書だが、金子は酷評している。この点から、井出という人物に対する興味は、大いに削がれてしまうが、本論の主題は、井出の調査を通じた南進基地台湾のインテリジェンスであり、彼の独

創性にはあまり期待していない。しかし、井出という人物を、あの時代に生きた一人の国家に忠実な能吏としての一面と、それとは対照的に中国の歴史、思想に傾倒し、世俗を超越したような出処進退を繰り返した、いわば読書人としての一面の両面から見るとき、もう少し厚みのある人物像が浮かび上がるかもしれないとも思っている。本ノートでいささか試みた点である。

さて、本ノートは基礎研究として、井出の生涯と業績について、その全体像を示すことを意図しているが、前述のとおり、それは金子が三十六年前にかなりの精度で行っている。筆者が新たに加えられるのは、実はそれほど多くない。ただ、この三十六年の間に、台湾は目覚ましい経済発展と民主化、社会の成熟化を実現し、台湾人アイデンティティーを模索する中で、日本時代の台湾を再評価し、またそれに呼応する形で、日本の若い研究者も、この時代を正面から取り上げるようになった。井出季和太についても、もう一度スタートラインに立って検討する必要があるようになった。ことに『台湾総督府公文類纂』の刊行とデータの一般公開によって、新たな資料が入手できるようになったことは大きい。本ノートに加えることのできた希少かつ貴重な資料である。

二、井出季和太の全仕事

井出季和太の基礎資料として、井出の経歴と著作を以下に時系列に列記し、年譜・著作目録とした。彼の著作はほとんど台湾総督府、のちに満鉄東亜経済調査局の命によって行われた調査である。わずかに井出の個人的な興味からする著作もあるが、それもまた時代の趨勢と離れていない。「井出季和太の全仕事」と題したが、筆者或いは他の研究者によってさらに充実させていくことを期している。著作は、復命書、報告書、論文、寄稿文、翻訳等、井出の執筆

「井出季和太の全仕事」

西暦	年	月	履歴・著作	備考
一八八〇	年	四	月 三日 長野県南佐久郡に生まれる	本籍…長野県南佐久郡臼田町
一九〇九	年	七	月 十三日 東京帝国大学法科政治学科卒業	
一九一一年	年	十一	月 六日 文官高等試験合格	
一九一二年	年	一	月 十八日 樺太庁属拜命。樺太に赴任。主計課兼水産課勤務。 のち庶務課兼務。北海道出張二回	
一九一三年	年	七	月 二十六日 樺太庁長官官房勤務	
一九一四年	年	十二	月 十五日 樺太庁退任	
一九一五年	年	八	月 二十八日 台湾総督府赴任。民政部財務局勤務	
一九一六年	年	三	月 一三日～二七日 新竹、台中、嘉義、台南、阿猴（屏東）各 庁へ出張 「糖業並ニ地方負担ニ関スル事項 復命書」※	

にかかるすべての文字史料を対象とした。金子論文（一九八二年）に見えないものには「※」を付した。履歴については、『台湾総督府公文類纂』から多数の辞令、叙勲の資料を入手したが、煩雑になるので一部を除き省略した。履歴と著作表題は、同じ欄に記した。著作は、単行本を『』、その他を「」で示し、出版社、掲載紙・誌を備考に示した。彼の膨大な著作群は、井出季和太という人物について、ほとんど一つの事しか教えてくれない。それは、井出が公務として依頼者の意図を汲みながら、あくまで客観的に、しかも効率よく報告書をまとめる優秀な調査マンであったことである。この点はまさに金子の指摘するとおりである。一方で、著作の表題だけを追って行っても、日本の台湾政策、南洋政策、そして大東亜共栄圏構想の意図が浮かび上がるといふ利点がある。

同	年	七	月	十三日～二十六日 花蓮港及台東庁管内へ出張 「花蓮港及台東庁 稅務調査 復命書」※	
同	年	十一	月	十三日 台湾総督府税関監視官兼税関事務官就任	
一九一八年	年	七月	月	十三日 基隆税関支署長就任	
同	年	六月	月	六日 税関事務官専任となる	
同	年	九月	月	十三日 打狗(高雄) 税関支署長就任	
一九二一年	年	二月	月	二十六日 廈門、汕頭、広東及英領香港へ出張命令	三月八日～四月十日現地滞在
同	年	三月	月	「支那の思想問題と公羊学」	『台湾時報』(台湾総督府内台湾時報発行所) 第二十号
同	年	十一月	月	「香港の設備(上)」「同(下)」	『台湾時報』第二十八号、二十九号(十二月)
一九二二年	年	一月	月	「香港の阿片事情」	『台湾時報』第三十号
同	年	四月	月	「香港の貿易(一)」「同(二)」「同(三)」	『台湾時報』第三十三～三十七号(八月)
同	年	十月	月	「広東の貿易(一)」「同(二)」	『台湾時報』第三十九号、第四十号(十一月)
同	年	十一月	月	「南支那重要港の港勢」	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第六十四輯)。調査復命書
同	年	十二月	月	「汕頭の貿易」	『台湾時報』第四十一号
同	年	十二月	月	「香港の港勢と貿易」	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第六十三輯)。調査復命書
一九二三年	年	二月	月	「廈門の貿易」	『台湾時報』第四十三号
同	年	三月	月	十三日 高等警察事務嘱託、警務局勤務、保安課勤務	
同	年	五月	月	七日 海外に於ける制度及び経済調査事務嘱託。総督府官房調査課勤務	
同	年	十一月	月	「支那に於ける労働問題」	『台湾時報』第五十号
同	年	十二月	月	「支那に於ける阿片問題」	『台湾時報』第五十一号
一九二四年	年	一月	月	「上海築港問題の過去及現在」	『台湾時報』第五十二号

同	同	一九二七	同	一九二六	同	同	一九二五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
三	二	一	一	一	十二	六	一	十二	十二	九	八	六	五	四	三	二				
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
『支那関税特別会議の経過』	『革命政治と三民主義(一)』、『同(二)』	『新たに起れる支那の経済抵抗運動』 十八日 支那国民政府現状及び将来に関する調査事務嘱託。 総督官房調査課勤務	『新たに起れる支那の経済抵抗運動』	十五日 台湾総督府在外研究員拜命	『支那関税改正問題』	『領台以来の台湾貿易大観』	台北税関監視部長転任	十五日 海外に於ける制度及び経済調査に関する事務嘱託 により、総督府から三〇〇円の賞与支給	二十五日 海外に於ける制度及び経済調査に関する事務嘱託 により、総督府から三〇〇円の賞与支給	『上海の関税制度(一)』、『同(二)』、『同(三)』	『上海の関税制度(一)』、『同(二)』、『同(三)』	『上海の土地及裁判制度』	『上海の居留地制度(上)』、『同(下)』	『上海港と其の設備』	『上海の概況』	『支那に於ける報界の事情』	『支那の排日問題』			
命書	『台湾時報』第九十四、九十五号(十月)		『台湾時報』第七四号	一年間中国在留(大正十五年三月下旬～昭和二年四月下旬)	『台湾時報』第六十八号	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一〇二輯)		調査課嘱託の井出他三名に		『台湾時報』第六十七、七十三号(一九二五年十一月)	『台湾時報』第五十九号	『台湾時報』第五十七号、第五十八号(七月)	『台湾時報』第五十六号	『台湾時報』第五十五号	『台湾時報』第五十四号	『台湾時報』第五十三号				

同	同	同	同	同	一九二九	同	同	同	一九二八	同	同	同
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
十	七	五	十	五	二	十	八	七	五	十二	十一	四
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
『商支那の開港場』第一編、『同』第二編、『同』第三編	二十五日 台湾総督府臨時産業調査会幹事就任	四日 南支那及英領香港へ出張命令 二日 殖産局兼務(臨時産業調査事務)	『支那内国関税制度』其二	『支那最近の時局と貿易関係』	『支那内国関税制度』其一	総督府官房調査課兼務	『支那の国民革命と国民政府』第一編	三十一日 台湾総督府翻訳官兼事務官転任	『支那の国民革命と国民政府』	『支那の時局と支那貿易の消長』	『支那の時局と支那貿易の消長(一)』、『同(二)』、『同(三)』、『同(四)』、『同(五)』、『同(六)』	『胡適の支那哲学論』
台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一四輯、一九八輯、二〇四輯)と一九三一年六月南支那及英領香港出張調査報告		十二月二十二日と三月四日、計七十三日間	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一七六輯)	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一七〇輯)	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一五八輯)	南支南洋其他海外に於ける制度並びに経済調査に関する事務上必要のため	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一五二輯)	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一四九輯)	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一四三輯)	台湾総督官房調査課(南支那及南洋調査第一四三輯)	『台湾時報』第九十六(一〇一)号(一九二八年四月)	大阪屋号書店。胡適『The Development of the logical method in Ancient China』(一九二一年上海)の翻訳

同	一九三五	年	五	月	十四日 台湾総督府熱帯産業調査会幹事拜命	『台湾時報』第一八五号
同	同	年	十二	月	「雲南の土俗に就て」	『南方土俗』第三卷第二号
同	同	年	三	月	『支那内国関税制度』其一、其二、其三、其四	台湾総督官房調査課（南支那及南洋調査第二二五輯）
同	同	年	二	月	『支那の奇習（一）』同（二）～（一〇）	『台湾時報』第一七一～一八〇号（十一月）
一九三四	年	一	月	六日 高等警察講習会講師拜命	担当…支那出版物に就て	
同	年	十一	月	「時局と支那貿易外概観 附香港及台湾（一）」同（二）、（三）	『台湾時報』第一六八～一七〇号（一九三四年一月）	
同	年	十	月	「蒙古青海地方土人の奇習（一）」同（二）、（三）	『台湾時報』第一六七～一六九号（十二月）	
同	年	九	月	「安南猪族の奇習」	『台湾時報』第一六六号	
一九三三	年	四	月	「西南支那土俗資料（一）」同（二）、（三）	『南方土俗』第二卷第二、三号、第三卷第一号（一九三四年四月）	
同	年	十二	月	「南支那蕃族の奇習（一）」同（二）～（九）	『台湾時報』第一五七～一六五号（一九三二年八月）	
同	年	八	月	『支那内国関税制度』其三	台湾総督官房調査課（南支那及南洋調査第二〇八輯）	
同	年	八	月	十日 東京、長崎、長野、福岡へ出張		
一九三二	年	四	月	「台湾蕃族の人口制限に就て」	『南方土俗』第一卷第四号	
同	年	十二	月	「支那内国関税序論」	『台湾時報』第一四五号	
同	年	十	月	「支那鑛金の由来」	『東亜経済研究』第十五卷第四号	
同	年	十	月	「対支貿易の不振と台湾貿易の振興策」	『台湾時報』第一四三号	
一九三一	年	二	月	「領台以来の貿易に関する法制（一）」同（二）	『台湾時報』第一三五、一三六号（三月）	
同	年	十二	月	「台湾改隸前の貿易（一）」同（二）	『台湾時報』第一三三、一三四号（一九三二年六月）	

同	年	五	月	『支那の奇習と異聞』	平野書房
同	年	六	月	『領台趣史』	『台湾時報』第一八七号
同	年	八	月	三十日 台湾総督府事務官兼任台湾総督府交通局理事退任 陸叙高等官二等	
同	年	九	月	『民族の動静より見た台湾と南支那』	『東洋』第三十八年第九号
同	年	九	月	『支那貿易の大観と南支重要港の港勢(一)』、『同(二)』	『台湾時報』第一九〇、一九一号(十月)
同	年	十一	月	『台湾より熱河を尋ねて(一)』、『同(二)』	『台湾時報』第一九二、一九三号(十二月)
同	年	十二	月	『興味の台湾史話』	寓報社
一九三六	年	一	月	『香港の地名に就て』	『台湾時報』第一九四号
同	年	八	月	『海南島の人民(一)』、『同(二)』、『同(三)』	『台湾時報』第二〇一〜二〇三号(十月)
同	年	十二	月	『海南島志』	台湾総督府熱帯産業調査会 陳銘樞編『海南島志』(民国二十二年、上海、神州国光社)の翻訳
一九三七	年	二	月	『台湾治積志』	台湾日日新報社
同	年	二	月	『福建省地方の習俗(一)』、『同(二)』、『同(三)』、『同(四)』	『台湾時報』第二〇七〜二〇九、二一一号(六月)
同	年	五	月	『台湾熱帯産業の現状』	『東洋』第四十年第五号
同	年	九	月	『南支那貿易と台湾特殊貿易の検討(一)』、『同(二)』	『台湾時報』第二一四、二一五号(十月)
同	年	十	月	『時局と支那民族性』	『台湾時報』第二一五号
同	年		月	『中華民国婚姻法』	『比較婚姻法 第一部——婚姻の成立——』岩波書店
一九三八	年	一	月	『南支貿易の展望と我が対南支貿易の将来(一)』、『同(二)』、『同(三)』	『台湾時報』第二二八、二三〇、二三二号
同	年	三	月	『台湾と南支那(一)』、『同(二)』	『東洋』第四十一年第三、四号(四月)
同	年	五	月	『福建民族と南洋華僑』	『南洋』第二十四卷第五号
同	年	七	月	『廈門の今昔と時局後の使命』	『台湾時報』第二二四号
同	年	九	月	『南支那の資源と経済』	台湾総督府熱帯産業調査会

同	年	十	月	「南支那の展望と其の対策」	『東洋』四十一年第十号
同	年	十一	月	「時局と広東省貿易（並に香港貿易）大観」	『台湾時報』第二二八号
同	年	十一	月	「広東民族と革命後政權の推移」	『南支南洋』第一六一号
同	年	十二	月	二十五日 台湾総督府熱帯産業調査会囑託解任	
同	年	十二	月	二十六日 東亜経済調査局事務囑託	
一九三九	年	一	月	「南支那の資源と経済価値」	『東洋』四十二年第一号
同	年	一	月	「南洋華僑の婚姻関係に就て」	『南洋』第二十五卷第一号
同	年	二	月	「福建華僑の送金と金融機関（上）」、「同（下）」	『南洋』第二十五卷第二、四号（四月）
同	年	三	月	「海南島と其の民族」	『南洋』第二十五卷第三号
同	年	四	月	一日 南滿州鉄道株式会社東京支社事務囑託	
同	年	五	月	「南洋華僑の動向に就いて」	『東洋』四十二年第五号
同	年	八	月	「華僑の現状」	『東洋』四十二年第八号
同	年	十	月	「比律賓に於ける華僑」	滿鉄東亜経済調査局（南洋華僑叢書第三卷）
同	年	十二	月	「支那革命と南洋華僑」	『南洋』第二十五卷第十二号
同	年	十二	月	「商支那の産業と経済」	大阪屋号書店
一九四〇	年	一	月	「南洋華僑最近の動向と将来」	『東洋』四十三年第一号
同	年	二	月	「南支那農業問題の研究」	陳翰笙著「Landlord and Peasant in China. study of the Agrarian Crisis in South China」の翻記
同	年	五	月	「事変と南支那貿易の展望」	『東洋』四十三年第五号
同	年	六	月	「台湾の公業と南支那の集団地主制度」	『東亜学』第二輯
同	年	六	月	「現下の華僑概観」	東洋協会「調査資料パンフレット」第四二輯
同	年	十	月	「南洋の華僑」	「海を越えて」第三卷第十号
同	年	十一	月	「時局と英国対支貿易の消長」	博士論文・「支那内閣税制度」（一九三四年十一月十四日提出）
同	年	十二	月		『東洋』四十三年第十二号

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一九四一年		
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
	十二	十一	十	十	十	九	八	八	七	五	五	四	四	三	二	二	二	二	二	二	一	
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	
「南洋華僑の動態」	「海南島の重要性」	「臨戦体制下の英領馬來の動向」	「我カ南進政策ヲ繞ル緬甸ノ政治經濟動向」	「我カ南進政策ヲ繞ル香港ノ政治經濟動向」	「泰國の華僑」	「蘭印印度の華僑事情」	「南支那民族史」	「大東亞建設と南洋華僑」	「タイ國華僑の動向」	「仏印華僑の動向に就て」	「南方華僑對策論」	「南洋と華僑」	十七日 拓殖大學專門部講師就任	「南進基地としての台灣の認識」	「改訂海南島志」	「英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑」	「地理教育」第三十三卷第四号	「改訂海南島志」	「英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑」	「英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑」	「英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑」	「英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑」
「創造」第十一卷第十三号	「海を越えて」第四卷第十二号	「臨戦体制下の南方諸國の動向」(滿鉄東亞經濟調査局) 世界情勢調査委員会昭和十六年度第二回報告	「我カ南進政策ヲ繞ル南方諸國ノ動向」(滿鉄東亞經濟調査局) 世界情勢調査委員会昭和十六年度第一回報告第三部資料篇(一)ノ七	「我カ南進政策ヲ繞ル南方諸國ノ動向」(滿鉄東亞經濟調査局) 世界情勢調査委員会昭和十六年度第一回報告第三部資料篇(二)ノ三	「海を越えて」第四卷第十号	「蘭印読本」(誠美書閣)	大阪屋号書店 徐松石「粵江流域人民史」(民国二十八年、中華書局)の翻訳	「東洋」第四十四年第八号	「新亞細亞」第三卷第七号	「海を越えて」第四卷第五号	「太平洋」第四卷第五号	三省堂	支那經濟事情担当。のち滿支經濟事情担当	「東洋」第四十四年第三号	松山一房	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	滿鉄東亞經濟調査局(南洋華僑叢書第五卷)	

同	一九四二年	一月	「香港の掏摸と裁判」※	九日 『朝日新聞』朝刊四面
同	同	一月	「支那・仏印間の新旧植民史」	『南洋』第二十八巻第一号
同	同	一月	「華僑群」	『国策研究』第十三巻第一号
同	同	一月	「海南島黎族の文身に就いて」	『民俗台湾』第二巻第一号
同	同	二月	「香港雜俎」	『海を越えて』第五巻第二号
同	同	二月	「南洋の華僑問題」	『南方事情』(大阪市産業部貿易課)上巻
同	同	三月	「南方華僑論」	『南方事情』(日本南方協会)
同	同	三月	「大東亜建設と華僑対策」	『東洋』第四十五年第三号
同	同	三月	「大東亜戦と華僑対策」	『外地評論』第五巻第四十一号
同	同	三月	「マレー華僑分析(一)」 「民族意識が強烈」※	二十一日 『読売新聞』朝刊四面
同	同	三月	「マレー華僑分析(二)」 「教育は英国流」※	二十五日 『読売新聞』朝刊四面
同	同	三月	「マレー華僑分析(三)」 「親日へ転向」※	二十七日 『読売新聞』朝刊四面
同	同	四月	「南洋の華僑」	『南洋地理体系 第一巻南洋総論』(ダイヤモンド社)
同	同	四月	「南洋華僑の全貌」	『支那』(東亜同文会)第三十三巻第四号
同	同	四月	「共栄圏建設と華僑の将来」	『エコノミスト』第二十年第十三号
同	同	五月	「南支那の経済建設」	『東亜経済年報 昭和十七年度版』
同	同	五月	「マレーの労働問題——南方華僑の労働事情を中心に——」	『社会政策時報』第二六〇号
同	同	五月	「南支那民族と南方華僑」	『歴史』(歴史文化研究会)第一七巻第五号
同	同	六月	「南洋華僑概観」	『大南洋年鑑 昭和十七年版』
同	同	六月	「旧英領北ボルネオ、サラワク」	『大南洋年鑑 昭和十七年版』
同	同	六月	「海南島の産業」	『南洋地理体系 第二巻海南島・フィリッピン・内南洋』(ダイヤモンド社)
同	同	六月	「大東亜華僑対策」	『台湾時報』第二七〇号
同	同	六月	「華僑」	六興商会出版部

同	年	六	月	「馬来統計書」	国際日本協会（大東亜統計叢書第一部）
同	年	六	月	「南洋華僑事情」	日本貿易振興協会（講演第九輯）
同	年	六	月	「徳義の商道を拓け 目覚めよ南方華僑」※	三十日『朝日新聞』一面 大東亜諸民族への公開状⑥（署名記事）
同	年	七	月	「大東亜国土計画と南方華僑」	『大東亜国土計画を語る』（日刊工業新聞社）
同	年	七	月	「南洋の華僑」	『南方問題十講』（第一書房）
同	年	九	月	「台湾の近況」	『東洋』第四十五年第九号
同	年	十	月	「英国のマレー攻略史」	『南方アジア』（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社）
同	年	十	月	「マレーの華僑」	『南方アジア』（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社）
同	年	十	月	「華僑問題に就いて」	『国際経済研究』第三卷第十号
同	年	十一	月	「共栄圏の建設と南方華僑労働者の役割」	『工業国策』第五卷第十一号
同	年	十二	月	「南方華僑労働問題——南方華僑の労働事情を中心として——」	『南方共栄圏の労働問題』
同	年	十二	月	「南方開発史」	皇国青年教育協会
同	年		月	「中華民国婚姻法」	『比較婚姻法 第二部——婚姻の証明及効果——』
一九四三	年	一	月	「支那民族の南方発展史」	万江書院（井上民族政策研究所研究叢書第二輯）
同	年	一	月	「北ボルネオ・サラワク王国の建設」	『海を越えて』第六卷第一号
同	年	二	月	「共栄圏の建設と日本民族性」	『南洋経済研究』第六卷第二号
同	年	四	月	「華僑について」	『南方圏総合講座』第二卷（研進社）
同	年	五	月	「昭南島の性格と将来の使命」	『海を越えて』第六卷第五号
同	年	八	月	「フィリピン史」	『南方文化講座 一、歴史篇』（三省堂）
同	年	九	月	「南方華僑論」	中央公論社（満鉄東亜新書）
同	年	十一	月	「葡萄牙の東亜侵略と澳門の性格」	『東洋』第四十六年第十一号
同	年	十一	月	「南進台湾史攷」	誠美書閣
同	年		月	「フィリピンの華僑」	『東亜経済懇談会会報』第二卷第十一号

一九四四年	一月	「南洋華僑の政治的性格」	「南洋」第三十卷第一号
同	二月	「華僑対策」	「東亜経済年報 昭和十八年度版」
一九四七年	十月	「三民主義と中国の革命」	六興出版部
同	四月	一日 紅陵大学政経学部教授就任。担当中国研究、研究指導	
一九五〇年	一月	「講和会議と台湾の帰趨」	雨田居
一九五一年	四月	紅陵大学大学院経済学研究科国際経済専攻教授就任。南洋 経済研究・南米経済研究担当	
一九五二年	十二月	「南洋に於ける華僑の歴史的背景」	「拓殖大学論集」第四号

三、井出季和太という人物

前掲の表を「井出季和太の全仕事」と称したものの、実は官吏時代以外の記録はほとんどない。推測を交えた紹介になるが、基礎研究の一環としてご容赦いただきたい。もともと致命的なのは、通常の伝記ではもともと魅力的な部分であるべき十代後半から二十代の「多感な時期」或いは「青春時代」の記録がないことである。二十代最後の年に帝国大学を卒業して即官僚人生では、誰も魅力を感じてくれそうにない。

履歴書は帝国大学卒業から始まっているが、二十九歳で卒業というのは、当時の学制でもかなり遅い。病弱というのがよくある理由であるが、確かに井出はその後病気を理由に退職したことがある。身体壮健ではなかったようだ。

『在臺の信州人』⁴に、総督府税関事務官当時の井出の人物紹介がある。履歴書等に見られない人物像として、「弱冠より陽明学を攻むる所あり」「(明治)四十二年東京帝国大学政治学科を出づるや、操觚者として中央言論界に活躍し

軟硬両面に其才筆を揮ひて声名を博す」とある。中国思想については、後年、胡適の本を翻訳する等、素養のあったことは知られる。卒業後すぐに操觚者、つまり新聞記者（むしろ論説執筆者のような形か）として活躍していたようであるが、記録は見つかっていない。ただ、高等文官試験合格までのわずか二年あまりのことで、試験勉強が必要でなかったとしても、ここにあるような活躍がどこでどのように可能であったのか、疑問はある。

樺太庁での三年間は、主計課兼水産課勤務（のち庶務課も兼務）のあと長官官房勤務で終わっている。北海道に二回出張した他は、人事異動しか分らない。大正三（一九一四）年十二月に樺太庁を辞めてから台湾赴任まで、八月の空白がある。大正四年八月十三日付民政長官秘書課長宛樺太長官の電報に「井出季和太病氣退官最終俸給三級」とある。台湾総督府で雇うために樺太庁を辞めた理由と待遇を確認したのであろう。その少し前、八月十日付安東総督宛中川友次郎財務局長「内申」によれば、井出を台湾に呼ぶ理由は「稅務事務ノ為必要ニ付」とある。すでに稅務のエキスパートとして名が知られていたものか。当時の日本の版図から言えば、極北極寒の地から極南極暑の地への異動である。いずれも、当時の日本人には快適な場所ではない。樺太を病気で辞めたとなると、ここに井出の何らかの考え（辺境への好奇心？ 外地行政への興味？）が働いていたと考えるべきだと思いが、これも不詳である。八月二十八日台湾総督府属となり、民政部財務局勤務が始まる。八か月のブランクがあるのに、決めたとなると夏の終わりの酷暑に赴任するという、この経緯も分からない。ちなみに赴任当時の民政長官は、南進論者として知られた内田嘉吉であった。

台北での総督府勤務開始から半年後、井出は、大正五年三月十三日から三月二十七日までの十四日間、新竹、台中、嘉義、台南、阿猴（現在の屏東）各庁へ出張し、翌四月には「糖業並二地方負担ニ関スル事項」と題する「復命書」を安東総督宛に提出している。「調査マン」としての最初の仕事であった。小手調べといふべきか。わずか二週間の台

北く阿猴の往復で、計六五枚の報告をものしたこの新米官吏を、総督府の彼の上司たちがどう見たかは容易に想像できる。井出のこの調査に対する異常な能力を活用するに若くはないと考えたはずである。内容もさることながら、その効率の高さは、「異常」としか形容できない。案の上、同じ年の七月十三日～七月二十六日、今度は、東部海岸、花蓮港及台東管内へ出張を命じられ、「花蓮港及台東庁稅務調査復命書」計四十二枚を提出している。わずか十三日間の調査である。当時の東部の交通事情から考えて、大半は移動時間であったと思われるが、徴税に関わる土地整理の問題、蕃族と本島人の違い等、あらゆる問題に興味を持っている。資料は現地の日本人官吏が提供したであろうが、現地人の聞き取りも行って、過去数年の数字に予測される本年度の徴税額を加えて表にしている。やはり「異常」である。おそらくはこの二つの復命書が井出の総督府における役割と、そして彼の将来を決定した。

大正十（一九二一）年には、厦門、汕頭、広東及び英領香港へ出張しているが、この時もわずか一か月の現地滞りで、ほとんど南中国の専門家のように多くの著作をものしている。

大正十五年一月十五日には台湾総督府在外研究員を命ぜられ、中国に一年間出張在留することとなった。翌昭和二（一九二七）年一月十八日に「支那国民政府現状及将来二関スル調査事務」を委嘱された。この時はまだ中国滞在中であった。委嘱状に「すでに在外研究員として支那経済及び財政、特に南支那、上海、大連等本島と関係する地方の経済、貿易並びに関税状態を研究中」という説明がある。昭和四年には南中国と香港に出張している。総督府は時に応じて井出にテーマを与え、井出は資料を読み込むと同時に現地に出張して調査し、それを出張報告の形で完成させ、それがやがて論文や冊子、単行本として公刊されるというパターンが出来ていたようだ。

井出は二十年に及ぶ総督府勤務で、警務局保安課、官房調査課、殖産局等の部局や、臨時産業調査会、熱帯産業調査会等の部会を転々とし、また職務も事務官、高等警察事務嘱託、翻訳官等さまざまであるが、実際の仕事は、税関

に関わる短期間の行政官的な仕事以外は、すべて調査業務であった。昭和三年に拝命した翻訳官を例に挙げれば、総督府で翻訳官となった数多くの官吏の中で、おそらく井出は唯一の高等文官合格者であった。⁽⁵⁾井出と同じ高等官三等には、著名な言語学者の小川尚義がいるが、小川は、辞典の編纂等教育関係の息の長い仕事に専従している。井出の場合も、例外的に調査に専従する要員として待遇されていたのかもしれない。

このような例外措置は、昭和十年八月の退官時に問題化する。井出の辞職願を受けて、内閣から「面白からず」との意見が出た。高等文官出身で二十年間をほとんど事務官で過ごした官吏はあまり前例がないということであろう。「右者退官願出候処同人ハ現高等官三等経過九年二月余ノモノニシテ且成績優秀ナルモノニ付此ノ際勅任官ニ陞格ノ恩命ニ浴セシメ度モ定員ノ關係上已ムナク兼任トシテ優遇セントスルモノナリ」として、退官間際に井出を交通局理事兼任として高等官二等に昇格させてから辞表を受理した。高等官二等は勅任官であり、本省であれば局長クラス以上の行政官、軍隊であれば少将以上の軍人の位階である。井出は「閣下」と呼ばれる身分になったのである。ちなみに辞職願には「家事の都合」とあるが、真の理由は年齢にあったと思われる。この時点で井出はすでに五十五歳。通常であれば退官して悠々自適の生活に入ってもおかしくないが、井出はなお台湾総督府熱帯産業調査会嘱託として旺盛な執筆活動を続けた。同会を解任され東亜経済調査局事務嘱託となるのは、昭和十三年の十二月のことであった。井出の調査は対象を南洋華僑にシフトしていくが、彼が拠点をどこに置いていたかは定かでない。ただ、昭和一四年四月に南滿州鉄道株式会社東京支社事務嘱託となっているから、この時点では日本に戻っていたようである。昭和一五年十一月には、「支那内国関税制度」で経済学博士号を取得し、翌十六年四月に拓殖大学専門部講師に就任した。その後の事情は、前言で述べたとおり、まったく記録がないが、執筆活動で見る限り、井出はまちがいなく戦時中における南洋華僑問題のオーソリテイであった。

井出の生涯を一瞥して彼の性格を想像するならば、まず言えるのは、世俗の欲に恬淡であったことである。そして異常な仕事人間であった。彼の調査にかける情熱は、生来の嗜好としか形容できない。前掲の『在臺の信州人』は、彼を称して「自信に厚くして主義に忠実なる君は 所見博くして創思に富める読書家、自己の奉養に淡薄にして公事に親切なり」と述べている。「自己の奉養に淡薄」とは、ストイックで生活に無頓着というような意味であろう。

調査に徹して自らの考えを表に出さなかつた井出の家庭生活を知ることはおさら難しい。ただ、終戦直後の一時期、戦災で焼け出された拓殖大学の教職員や学生が、焼け残った校舎に仮住まいしていた時期があつたが、そこに井出の姿があつた。「その当時すでに老齡なのですが、コンロ一つで火を燃しながら自炊をやっておられました」という同僚教員の証言がある。⁽⁶⁾当時の拓殖大学教職員住所録を見ると、連絡先には、井出の生家と思われる長野の住所のほかに、現住所が記されているが、井出は何度も移転したようであり、いずれも何某方とあつて仮住まいであつたことが知れる。家庭を持たず生涯独身であつたのかもしれない。井出の記録は、昭和三十一年度版の拓殖大学学友会『会員名簿』に載っている現住所で終わっている。その住所も昭和二十九年に移転したばかりのものである。拓殖大学退職年、没年とも不詳である。

四、結語——井出季和太研究の意義と進め方

「資料に語らせる」のは、調査研究の常道である。井出という没我的な人物の業績は、その意味では最も理想的な形で残されていると言える。彼の人物に批判的であつた金子も、前述のとおり「彼の活動の軌跡をたどることは、そのまま日本の南進政策の側面を解明する意味をもつと思われる」と述べている。著者自身の考えを炙り出すのが極め

て難しい以上、彼がいつどのように調査に取り掛かり、どこを訪ね誰の話を聞き、調査に当たってどのような原典資料を読み、その原典からどの部分を選択し、選択しなかったかを見ると、まさに調査の常道を、そのまま彼の著作に応用するしかないと思われる。井出の結論としたところは、おそらく日本政府の何らかの意向を反映しているであろう。彼を東亜経済調査局に呼んだ大川周明が、一つの時代を代表する思想家としての側面でのみ取り上げられるのとは好対照である。

本ノートの基礎研究を踏まえ、一つ一つ彼の著作を讀破、分析する以外に道はないと思われる。その先に、本論のテーマとした台湾総督府におけるインテリジェンスの役割、ひいては南進基地としての台湾のインテリジェンスの実態が見えてくるはずである。

加えて本ノートの作成に当たって、気づいたことがある。井出がほとんど唯一、主張めいたことを書き連ねた戦後昭和二十五年の著作『講和会議と台湾の帰趨』についてである。金子は「奇妙な時代錯誤的議論」と一蹴するが、考えてみれば自身が二十年あまり生活した台湾が戦後どのような道をたどるのか、関心を持つのは当然の情である。井出は同著において二二八事件の惨劇を紹介している。日本人にとっても痛みであったはずである。それを乗り越えて台湾がどのように平和繁栄の道に向かうのか、台湾の米国による委任統治や日本人行政官の派遣といった（突飛な）発想も、五十年間統治した台湾を一夜にして忘れ去るよりは、情において真つ当な反応であると思われる。しかも日本の台湾統治は、井出にとっては我が事である。その業績を高く評価するのも、あながち懐旧の情ばかりとは言えない。井出において戦前と戦後に断層はない。戦前外地にいた日本人は、戦後の日本から、彼らの「第二の故郷」をどう見ていたのか、これも井出研究の一つのテーマになる。

《注》

- (1) 南方資料叢書9 『台湾治績史』 青史社、一九八八年四月（復刻版） 呉密察解題
- (2) 『台湾近現代史研究』 第三号、一九八一年
- (3) 『講和会議と台湾の帰趨』 雨田居、昭和二十五年十一月
- (4) 中村茂夫 『在臺の信州人』、日本公論社臺灣支局、大正十四年五月一日、国立中央図書館臺灣分館所蔵
- (5) 富田哲 『日本統治期台湾をとりまく情勢の変化と台湾総督府翻訳官』 『日本台湾学会報』 第十四号、二〇一二年六月、一五八ページ
- (6) 長谷部茂編著 『国際貢献の文脈その1——満州・中国編——』 学校法人拓殖大学、二〇〇五年三月、三二八ページ

（原稿受付 二〇一八年一月九日）